



**JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1**

Thursday 17 May 2001 (afternoon)

Jeudi 17 mai 2001 (après-midi)

Jueves 17 de mayo de 2001 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

---

**INSTRUCTIONS TO CANDIDATES**

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

**INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS**

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- Rédiger un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

**INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS**

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の 1 (a) の文章と (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。  
(コメントリーを書きなさい。)

1 (a)

これまでのあらずし

(子供は体内へ、色・香・味のある塊を入れると体が汚れるように感じ、食べることに大きな苦痛を感じていた。やせ細ってきたことを学校から注意され、父は母を責めた。母に懇願され、子供は家族と食事を摂ったが吐いてしまった。)

5

その翌日であった。母親は青葉の映りの薄く射す縁側へ新しい菓座を敷き、俎板の  
厨丁だの水桶だの蠅帳だの持ち出した。それもみな買い立ての真新しいものだった。

母親は、自分と俎板を距てた向側に子供を坐らせた。子供の前には膳の上に一つの皿  
を置いた。

10

母親は、腕摺りして、薔薇いろの簪を差出して手品師のように、手の裏表を返して子  
供に見せた。それからその手を言葉と共に調子つけて擦りながら云った。

「よくご覧、使う道具は、みんな新しいものだよ。それから拵える人は、おまえさんの  
母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗ってあるよ。判ったかい。判ったら、さ、  
そこで――」

15

母親は、鉢の中で炊ききました飯に酢を混ぜた。母親も子供もこんこん囃せた。それ  
から母親はその鉢を傍に寄せて、中からいくらかの飯の分量を掴み出して、両手で小さ  
く長方形に握った。

蠅帳の中には、すでに膳の具が調理されてあった。母親は素早くその中からひとときれ  
を取出してそれからちよっと押えて、長方形に握った飯の上へ載せた。子供の前の膳の  
上の皿へ置いた。玉子焼鍋だった。

20

「ほら、鍋だよ、おすじだよ。手々で、じかに掴んで喰べても好いだよ」

子供は、その通りにした。はだかの肌をするする撫でられるようなころ合いの酸味に、  
飯と、玉子のあまみがほろほろに交ったあじわいが丁度舌一ばいに乗った具合――それ  
をひとつ喰べてしまうと体を母に抛りつけたいほど、おいしさと、親しさが、ぬくめた  
香湯のように子供の身うちに湧いた。

25

子供はおいしいと云うのが、ままり悪いので、ただ、にいと笑って、母の顔を見上  
げた。

「そら、もひとつ、いいかね」

母親は、また手品師のように、手をうら返しにして見せた後、飯を握り、蠅帳から具  
の一片れを取りだして押しつけ、子供の皿に置いた。

30

子供は今度は握った飯の上に乗った白く長方形の切片を気味悪く覗いた。すると母親  
は怖くない程度の威丈高になって

「何でもありません、白い玉子焼だと思って喰べればいいんです」  
といった。

35 かくて、子供は、鳥賊いかりというものを生れて始めて喰べた。象牙のような滑らかさがあ  
って、生餅より、よっぽど齧切れがよかった。子供は鳥賊鯨を喰べていたその冒険のさ  
なか、詰めていた息のようなものを、はっ、として顔の力みを解いた。うまかったこと  
は、笑い顔でしか現わさなかった。

40 母親は、こんどは、飯の上に、白い透きとおる切片をつけて出した。子供は、それ  
取って口へ持って行くときに、脅かされるにおいに振ためめられたが、鼻を詰らせて、思い  
切って口の中へ入れた。

白く透き通る切片は、咀嚼のために、上品なうま味に衝つまきくずされ、程よい滋味の圧  
感に混って、子供の細い咽喉へ通って行った。

「今のは、たしかに、ほんとうの魚に違いない。自分は、魚が喰べられたのだ——」

45 そう気づくと、子供は、はじめて、生きているものを噛み殺したような征服と新鮮を  
感じ、あたりを広く見廻したい欲ほびを感じた。むずむずする両方の脇腹を、同じような  
欲ほびで、じっとしてられない手の指で掴み掻いた。

「ひ ひ ひ ひ ひ」

50 無暗みくらに拮たが高たかに子供は笑った。母親は、勝利は自分のものだと見てとると、指についた  
飯粒を、ひとつひとつ払い落したりしてから、わざと落ちついて蠅は蠅はのなかを子供に見  
せぬよう覗いて云った。

「さあ、こんどは、何にしようかね……はてね……まだあるかしらん……」

子供は推い立だって絶叫する。

「すし！ すし！」

55 母親は、嬉しいのをぐっと堪たえる少し呆ほうけたような——それは子供が、母としては一  
ばん好きな表情で、生涯忘れ得ない美しい顔をして

「では、お客さまのお好みによりまして、次を差上げます」

最初のときのように、薔薇いろの手を子供の眼の前に近づけ、母はまたも手品師のよ  
うに裏と表を返して見せてから鯨を握り出した。同じような白い身の魚の鯨が握り出さ  
れた。

(岡本かの子「鯨」)

(注)

岡本かの子(一八八九〜一九三九)小説家・歌人。

- 1 子供が一つ一つの鯨を食するときの感覚とそれに伴う感情は、それぞれどのように描かれていますか。
- 1 子供がこの日、鯨を食べることができるようになったのは何故でしょうか。どのようなことが子供に作用を及ぼしたのかを考えなさい。
- 1 「生きているものをかみ殺したような征服と新鮮」という言葉から、こどものどんな状態が読み取れますか。
- 1 子供の母に対する感情と、子供の食えることに対する感情は、どのような関係にあるでしょうか。

1 (b)

月

ほんのりした空中の窓よ  
あざやかな時間の運転者が  
せつせと月を洗い清めてゐるよ  
旅行者よ、農夫よ、航海者よ

- 5 その頭の中に燈火をつけよ  
日光を持たない凶人もぬす人も  
いそいで美しい影の松火をともすがよい  
月は自然の幽霊であるから  
一つの眼のうちにこもった幽情を
- 10 地上へ映しながら光と影の文字をかくよ  
きよらかな、清らかな  
寂寥と光明の今宵の晴れた  
ほんのりした空中の窓は開いてゐるよ。

月

月が娘らのやうに

15 あかるい海辺で化粧してゐるときは  
わたしもよろこんで感賞の扇をひらかう  
しかし思はぬ木の間月に月が出たときは  
この村村の天然の釣ランプを  
しづかに眺めるにとどめよう

20 田舎の月はひっそりとして  
淋しい人は月の祭を好ましく思ひ  
古い昔の世界に遊び  
幽情をつくして端座してゐよう  
わたしはそこここと歩みながら

25 頭に幻をもてる人人にのみ  
この清らかな光線の帽子をあづけよう。

(佐藤惣之助 「雪に書く」 明治三年)

- 1 「あざやかな時間の運転者が／せつせと月を洗い清めているよ」という表現は、「ただ月の光が清らかである」と描いた場合と比較して、(月やその光に照らされた世界の)どんな様子を想像させるのでしょうか。
- 1 「頭の中に燈火をつけよ」「清らかな光線の帽子をあづけよう」という表現で、作者は何を言おうとしているのでしょうか。
- 1 作者は月を「空中に開いている窓」と捉えています。ここには、作者の月に対するどんな感情が読み取れますか。
- 1 二つの詩を比較し、月に対する作者の感情の類似点及び相違点を考えてみましょう。